

こんにちは。囑託員の村上です。

1月19日配信のトリビアでは明治22年（1889）から26年まで青森大林区署長を務めた高橋琢也と、彼が中心となって開設した林学の専門教育機関・有余学館についてお話ししました。今回は彼が青森大林区署長を務めていた頃、学校開設以外に関わったことについてお話しします。

さて、皆さんは相馬町という地名を聞いたことがありますか？

相馬町は現在の住所表示では港町2丁目と呼ばれている地域で、堤川河口の東岸にあります。この地域は明治20年代に旧弘前藩士の相馬駿が中心となって開墾したことから、相馬の功績をたたえて相馬町と命名されました。



相馬町開町記念碑

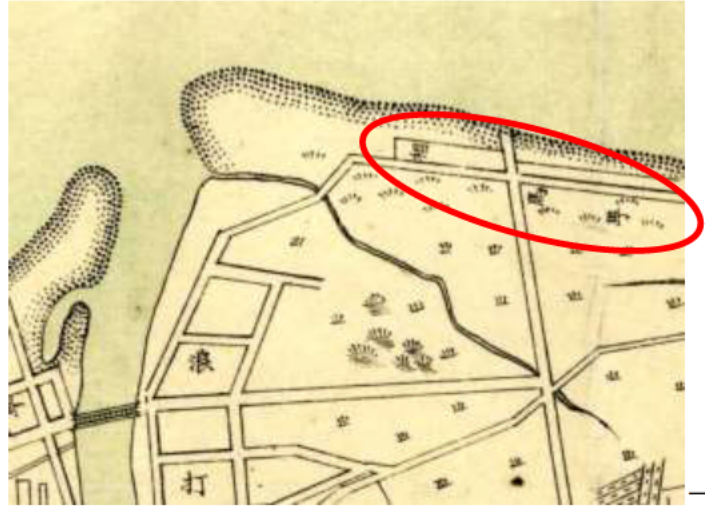
実は、この相馬町の開墾と高橋琢也には関係がありました。

明治25年、相馬は県の許可を受けて開墾事業に着手しますが、開墾当初、問題となったものの一つに移住者の住宅建設に使用する木材の入手がありました。移住者たちは経済的に困窮しており、また、木材は高価だったため、入手することが難しかったようです。

そこで、青森大林区署に対して木材を払い下げてもらえるようお願い出たところ、署長の高橋が開墾事業に理解を示し、払い下げを許可したといます。そして、青森大林区署管内の内真部小林区署によって払い下げが行われ、その木材を利用して住宅が建設されました。このことは、相馬が相馬町開墾に関する事項を書き留めた文書（末永洋一「資料紹介 青森市・相馬家文書の紹介」『市史研究あおもり6』青森市 2003年）に記録されています。

また、『相馬町百年の歩み』（相馬町百周年協賛会 1991年）には高橋が相馬に宛てた手紙の一部が紹介されています。その手紙は明治30年1月15日に書かれたもので、「漁師町家屋近く建築成功」という知らせを聞いて「大喜」したという内容です。

この手紙が書かれたのは高橋が国の山林行政のトップである山林局長を務めていた時期でした。高橋は青森を離れたあとも、開墾事業のことを気にかけていたのですね。



相馬町周辺(明治44年発行「青森市全図」、歴史資料室蔵)

※今回の内容は『新青森市史』通史編第3巻（青森市 2014年）、伊東洋『医学校をつくった男—高橋琢也の生涯』（中央公論事業出版 2011年）などを参考にしました。